

境川を通過するワカケホンセイインコの個体数及び飛去時間の変動

藤井 幹¹・佐山裕史²

Takashi FUJII, Hiroshi SAYAMA : Change in passage times and numbers of
Rose-ringed Parakeets at Sakai River

はじめに

ワカケホンセイインコ *Psittacula krameri manillensis* はホンセイインコ *P.krameri* の 1 亜種で、この亜種はインド南部やスリランカに生息している。日野 (1990) によれば、日本にはペットブームに乗じて大量に輸入されたが、1969 年以降、各地でかご抜けや故意による放鳥、業者から大量に逃げ出したなどのいろいろな原因が重なり、全国各地でワカケホンセイインコが確認されたとしている。その後、多くの個体群は衰退し、現在は東京都を中心とした 1,000 羽を超える大きな個体群と、千葉県、群馬県に生息する約 20 羽の少数の個体群のみである。東京都を中心としたグループは、東京都大田区の東京工業大学 (以下、東工大) 構内をねぐらとして都内各地に広がっている。埼玉県、神奈川県に生息する個体も、東工大から飛来していると考えられており、相模原市と大和市の個体については、ラジオテレメトリー調査により、このことが明らかになっている (日本鳥類保護連盟 2007)。筆者らは、神奈川県相模原市と東京都町田市の都県境を流れる境川沿いにおいて、相模原市等へ飛来した個体が、ねぐらへ戻る際に集まる安定した中継地を確認した。この中継地を通過する個体について調査することでいくつかの知見を得ることができたので報告する。

中継地の概要

中継地となっているのは相模原市鶴野森にある境川沿いの屋敷林のケヤキで (図 1)、ねぐらのある東工大から約 23km の位置にある (図 2)。冬期は、町田市側にヒマワリの種やリンゴを餌台に出している住宅があり、このケヤキと餌台とを行き来する多くの個体を確認されている。餌台を置いている住民へのヒアリングでは、本種は 2003 年頃からこの周辺に飛来するようになり、毎年 20 羽前後が餌台に飛来するとのことであった。筆者らが本種を確認した 2006 年 4 月には、このケヤキの樹洞で 1 番が繁殖しており、2007 年以降は対岸の町田市側にある町田市市民ホールにおいても 1~2 番の繁殖が確認されている。

このケヤキには、夕方になると相模原市方向から本種が飛来する。多いときには 70 羽を超える個体が集まり、集団で東工大方向へ飛去する。筆者の一人は、相模原市内で通年生息が確認されている西大沼において、夕方、本種 6 羽が鶴野森のこのケヤキの方角へ飛去するのを確認してい

1 : 日本鳥類保護連盟 〒166-0012 東京都杉並区和田 3-54-5,3F fuji@jspb.org

2 : 境川の斜面緑地を守る会

キーワード : ワカケホンセイインコ, ねぐら, 中継地, 外来種

Key words : Rose-ringed Parakeet, roost, staging area, exotic species

るため、相模原市に飛来する個体全てではないにしても、多くがこのケヤキに集まって通過していくのではないかと推測している。



図1 鶺野森の中継地

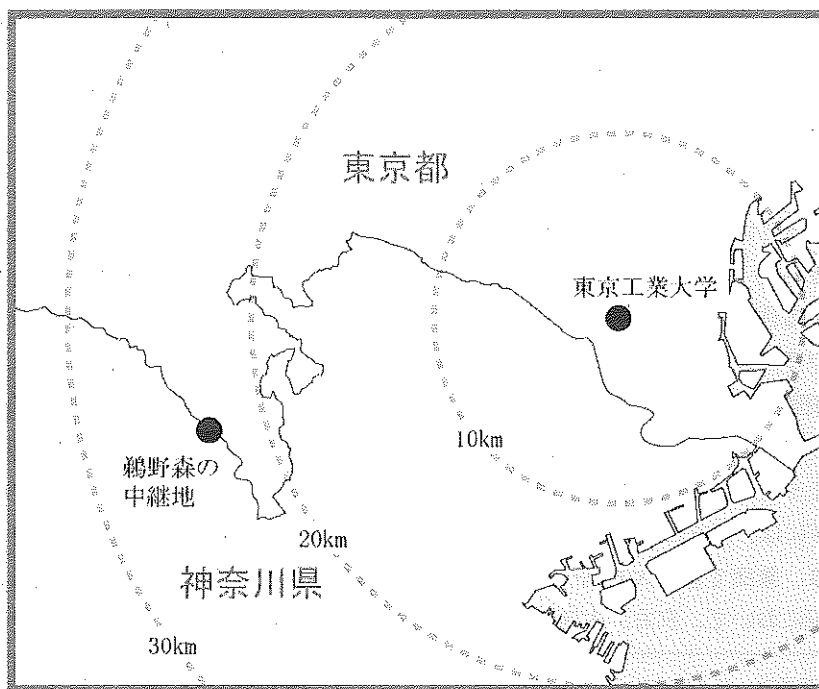


図2 鶺野森の中継地と東工大の位置関係

調査内容

この中継地を確認した2006年4月以降、定期的に定点調査を行った。日の入りの約2時間前から調査を開始し、ここを通過する個体の個体数、飛去時間、天候を記録した。天候は調査時の天候とした。カウントは基本的に目視としたが、可能な限り写真撮影を試み、正確な個体数を把握するよう努めた。本報告では、安定したデータを取ることができた2007年11月22日までの、のべ128回の調査結果の中で、信頼性があいまいなものを取り除き、残った107回分のデータをとりまとめ、考察した。

調査結果及び考察

飛去した個体数の変動を図3に、飛去した時間と日の入り時間、天候との関係を図4にとりまとめた。なお、本種は複数回に分かれて飛去することもあったが、その場合は最後に飛去した時間をデータとして使用した。

(1) 個体数変動

鶺鴒野森の中継地に集まる個体数の変動を図3から読みとると、10月以降に個体数が増加し、冬期は飛来数が多くなっている。しかし、繁殖期に入る4月頃から不安定になり飛来数は減少、5月から10月にかけては飛来数が少なく、そして10月以降にまた増加の兆しが見られる。これと同様の傾向は、中田(2008)の新宿御苑での報告にも見られる。この年間を通した変動について、以下に考察した。

営巣期に入ると個体数が減少する原因としては、非繁殖個体が飛来しなくなること、抱卵が始まると雌がねぐらに戻らなくなるなどが理由として考えられる。雄の多くは営巣中もねぐらに戻ることが分かっているが(日本鳥類保護連盟2007)、鶺鴒野森を通過する個体は半減することになる。

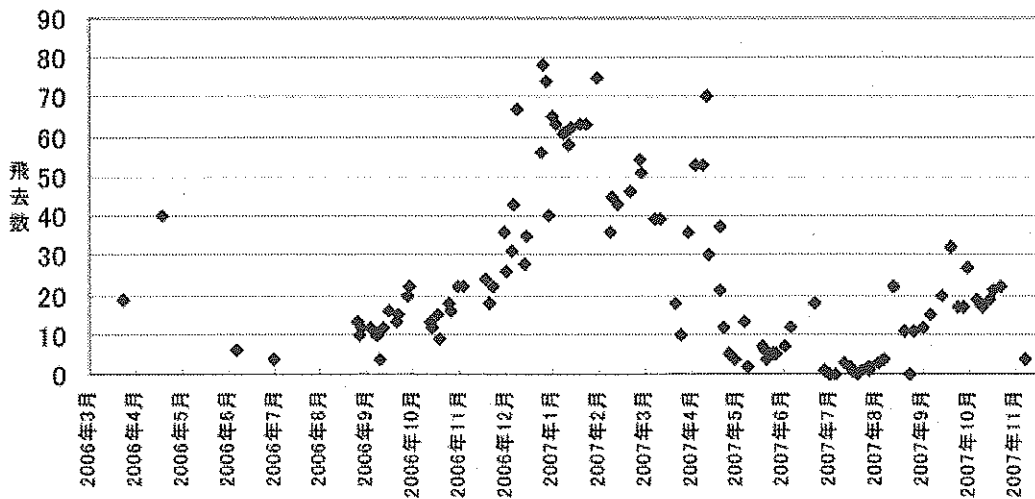


図3 鶺鴒野森に集まるワカケホンセイインコの個体数変動

夏期から秋期にかけて個体数が少ない原因としては、繁殖個体が巣立ち雛と共に営巣地を離れることがあげられる。東京都や神奈川県における筆者の観察例では、本種が巣立つのは5月末から6月下旬にかけてである。大和市で雛に発信器を装着したラジオテレメトリー調査では、巣立った雛はすぐに営巣地を離れ、親鳥と共に東工大のねぐらまで移動した。親鳥はしばらく営巣地には戻らず、ねぐらから10km圏内で巣立ち雛と暮らしていた事例が報告されている（日本鳥類保護連盟2008）。

秋期から冬期に個体数が飛躍的に増加する原因としては、営巣地を離れていた繁殖個体が営巣地に戻ってくることと、若鳥等の非繁殖個体の飛来が多くなることが考えられる。ただし、営巣地に鶉野森を通過する個体数から推測すれば、鶉野森より西で繁殖を行っている成鳥の数は、さほど多くないと考えられる。そして、繁殖を行っている個体は、巣外育雛期である夏期を除けば、冬期も含めて1年の多くを営巣地に固執して滞在するため（中田2008）、他地域の営巣地から冬期のみ相模原市に飛来して飛来数増加の原因となることは考えにくい。よって、増加個体の内訳は、若鳥等の非繁殖個体が多数を占めるものと推測される。なお、筆者の一人は、大和市において、夏期には見られなかった若鳥が、11月に少数の群れで飛来しているのを観察している。

(2) 飛去時間と日の入り時間、天候との関係

図4のグラフから、年間を通して日の入り時間と密接な関係にあることが分かる。晴れの日に対して、曇りの日は飛去時間が早くなることから、照度が大きく関係しているものと思われる。

しかし、冬期の12月、1月には、平均すると日の入りの20分前に鶉野森を飛去しているのに対し、夏期の6月、7月には、平均で1時間4分前には鶉野森を飛去している。これにより、単純に照度に左右されるわけではなく、体内時計のような機能も働いているものと思われる。

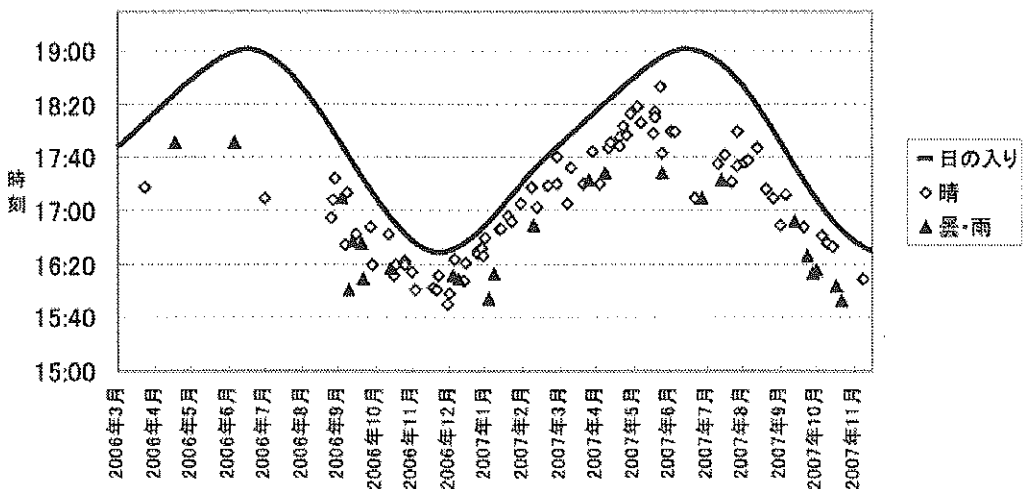


図4 ワカケホンセイインコの天候別の飛去時間と日の入り時間

引用文献

- 藤井 幹, 2008. 外来種の現状 ワカケホンセイインコ. 私たちの自然, 535:8-9, 日本鳥類保護連盟.
- 日野圭一, 1990. 都市に見るふるさとの熱帯. アニマ, 208:20-24, 平凡社.
- 中田玲子, 2008. 外来種ワカケホンセイインコの繁殖に関する研究. 東京農工大学卒業論文.
- 日本鳥類保護連盟, 2007. 外来種ワカケホンセイインコの生息実態調査. 2005 年度財団法人イオン環境財団助成事業報告書.
- 日本鳥類保護連盟, 2008. ワカケホンセイインコ (外来生物) の実態調査. 2006 年度財団法人イオン環境財団助成事業報告書.